

関西言語学会第48回大会シンポジウム(2023.6.11)

「視点とモダリティ—因果関係を含む言語表現を中心に—」

趣旨説明

このシンポジウムは、これまでさまざまな形で言語研究の中で取り上げられてきた、視点とモダリティという概念を通して、因果関係を含む表現について統語論、意味論の立場から議論することを目的とする。

言語研究における「視点」の重要性は、指示、移動表現、受動表現、授受表現などの諸現象の分析を通して広く知られている（大江 1975、久野 1978 など）。日本語文法研究と「視点」の問題については、松木正恵氏の 1992 年の論考が示唆的で、「視点」を「視座」すなわち「状況をどこから見るか」と、「注視点」すなわち「何を見るか」に分け、それまで曖昧にされてきた視点現象に対し、精緻な分析を与えている。統語論的・意味論的研究では、Peter Sells 氏が 1987 年の logophoricity に関する論考において提案した「伝達源 (source): 伝達の意図的行為者」「自己 (self): 命題内容がその心理状態・態度を記述する人」「基準 (pivot): その(時空に関わる)位置に関して命題内容が評価される人」の区別とそれらの間の階層性 (The Logophoric Hierarchy) が重要である。

本シンポジウムでは、従来の「視点」に関わる研究で中心的に扱われることのなかった理由や条件を表す文を対象にする。これら因果関係の表現ではこれまで二つの事態の関係性や主節のモダリティが議論されることが多かったが、本シンポジウムでは理由節や条件節内部のモダリティが取り上げられる。

第一発表者の有田節子（立命館大学）は、因果関係を表現する文（「論理文」）の時制形式と時間解釈について、時間を表す副詞節と比較しながら、時間的視点の観点からその特徴を明らかにする。特に、条件文の時制の分析には、発話時でも主節時でもない第 3 の基準時が必要であることを論じる。（有田, 2021a,b）

第二発表者の原由理枝（北海道大学）は、条件節と理由節が副詞節という同じ統語的機能を持ちながらも、両者が異なる意味タイプであることを主張する。条件節が event の量化を意味するのに対し、理由節が 2 つの saturated な命題 (Johnston, 1994) の関係を意味することについて中世日本語を含むさまざまな言語現象を通して議論する。「モダリティ」を節内に含みうるかどうか重要な鍵となる。（Hara, 2008, Hara et al., 2013）

第三発表者の西垣内泰介（神戸松蔭女子学院大学）は、「理由」「原因」を述部に含む「指定文」についての統語的分析を示す。「視点」(POV) と「視点保持者」(POV-holder) が関わる現象があることを指摘したうえで、「理由」の指定文では焦点要素が「視点投射」(POVP) (Nishigauchi, 2014a, 西垣内, 2014b)であることを議論する。

引用文献

有田節子(2021a) 「因果関係と時間—『原因』『結果』を主名詞とする連体修飾節を中心に—」. 嶋田珠巳・

- 鍛治広真編著『時間と言語』 pp. 167-184. 三省堂.
- 有田節子(2021b) 「時制形式の有無と副詞節のタイプ」. 庵功雄・田川拓海編『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す2 「した」「している」の世界』 pp. 21-49. ひつじ書房.
- Hara, Yurie (2008) Evidentiality of discourse items and Because-clauses. *Journal of Semantics* 25(3), 229–268.
- Hara, Yurie, Youngju Kim, Hiromu Sakai & Sanae Tamura (2013) Projections of events and propositions in Japanese: A case study of koto-nominalized clauses in causal relations. *Lingua* 133, 262–288.
- Johnston, Michael. 1994. the Syntax and Semantics of Adverbial Adjuncts: UCSC dissertation.
- 久野暲(1978) 『談話の文法』大修館書店
- Nishigauchi, Taisuke (2014a) Reflexive binding: Awareness and empathy from a syntactic point of view. *Journal of East Asian Linguistics* 23, 157–206.
- 西垣内泰介(2014b) 「エンパシーと阻止効果—「自分」の束縛と「視点投射」—」『言語研究』146: 109–133.
- 大江三郎(1975) 『日英語の比較研究—主観性をめぐって—』南雲堂
- Sells, Peter (1987) Aspects of Logophoricity. *Linguistic Inquiry* 18, 445-479.
- 松木正恵(1992) 「『見ること』と文法研究」『日本語学』11(8), 57-71.